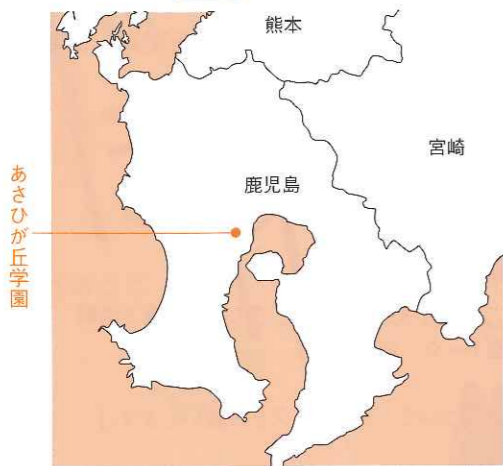




訪問記

鹿児島県 社会福祉法人落穂会 あさひが丘学園



- 法人名 社会福祉法人落穂会
- 設立年月日 1960(昭和35)年5月1日
- 所在地 〒891-1206 鹿児島県鹿児島市皆与志町2503
TEL 099-238-4821 FAX 099-238-5737
- 事業種別 あさひが丘学園(障害児入所施設28名・短期入所8名)
あさひが丘(施設入所52名・生活介護80名・短期入所10名・日中一時支援)
児童発達支援センター歩路・我路(児童発達支援20名・放課後等デイ20名・保育所等訪問支援・日中一時支援)
ガーデンキッズセルク(児童発達支援20名)
ガーデンキッズトリア(児童発達支援10名・放課後等デイサービス10名)
シュバル(放課後等デイサービス10名)
ワークショップあすもね(就労継続B20名)
ヘルパーステーションとわ(居宅介護・行動支援)
旭福祉センター(施設入所30名・生活介護20名・就労継続B20名)
第二旭福祉センター・ペーカリー楓・カフェNODOKA(自立訓練10名・就労移行10名・就労継続B20名)
他、共同生活援助(13カ所64名)、相談支援など
- ホームページ <http://asahigaokagakuen.jp/>

はじめに

例年になく次々と日本列島を襲う台風の合間を縫うように、9月10日～11日に、かねてから一度は訪問したいと願っていた鹿児島県鹿児島市にある社会福祉法人落穂会をお訪ねする機会を得た。

今回の訪問は、同法人が運営する障害児入所施設あさひが丘学園が新たに小規模ユニットケアを行う新園舎を建築されたので、ぜひ伺ってその暮らしの様子などを見せていただくことを一番の目的とし、併せて幅広く事業展開をされている同法人の事業所などを見せていただくこととした。

筆者はかつて障害児入所施設の園長をしていた時期があり、その頃、あさひが丘学園の水流純大園長(現理事長兼統括施設長)と親しくさせていただいた関係で、互いに「一度訪ねたい」「ぜひ訪ねてほしい」の関係となっていた。特に、「厚生労働省 平成23年度障害者総合福祉推進事業 指定課題14 障害児入所施設における小規模ケア化、地域分散化を推進する上での課題に関する調査」の研究委員で一緒にからは、障がいをもつ子どもたちの暮らしの場については、互いに思いを重ね合わせながら今日まで来た経過がある。今回の「訪問記」では、同学園の新園舎の様子を紹介を中心に、広く事業展開をする落穂会について報告したい。

社会福祉法人落穂会について

社会福祉法人落穂会は、前述の水流理事長の祖父水流國彦氏が1958(昭和33)年8月に鹿児島県内最初の民間知的障害児施設として「あさひが丘学園」を定員50名で創設、2年後の1960(昭和35)年5月に社会福祉法人落穂会として認可を受けた。その後、1967(昭和42)年に知的障害者更生施設「ゆうかり学園」(その後、社会福祉法人ゆうかりとして独立し、経営は別となる)、1979(昭和54)年には授産施設「旭福祉センター」を開設した。これらの施設は、「共生と共創」だれもが「生まれてきてよかった」と

思える共生社会を実現する」との経営理念の下、それぞれ独自性を尊重しつつその後の歩みを進め、今日まで鹿児島県のみならず、知的障害児・者の福祉向上に大きな役割を担い続けている。

あさひが丘学園

「あさひが丘学園」は、狭義の事業所としては、入所定員28名、短期入所8名の福祉型障害児入所施設であるが、法人内では同学園を母体とした事業体(グループ)として位置付けられているようである。歴史的には純大氏が3代目の園長に就任した平成11年を一つの転換期とし、同年に定員を90名から40名に削減すると共に、知的障害者更生施設あさひが丘学園成人部を入所定員40名、通所定員10名を開所して再編、その後グループホームの開始や通所定員増、短期入所事業や居宅介護事業などを展開し、成人になった方々の暮らしの充実を図ってきた。児童についても、障害児入所施設をその中心としながら、多面的、重層的な事業を展開してきており、どのような状況のお子さんやご家族であっても、支えるメニューが用意されている。いわゆる発達に気になるというお子さんの相談や支援から、養護性が高く入所が必要なお子さん、そしてご家族を支えることが子どもの発達を支えることにつながるという家族支援も含めて、切れ目なく支援が可能な体制は、今後の障害児福祉施設のあり方として大いに共感できるものだった。

新園舎での暮らし

～障害児入所施設あさひが丘学園～

障害児入所施設あさひが丘学園の新園舎建設は、平成27年度の施設整備等補助を受け、2015(平成27)年10月に着工、2016(平成28)年5月13日に竣工となった。総事業費は305,100,000円、補助金総額66,095,000円、自己資金239,005,000円(借入金含む)での事業だった。補助額が厳しいものとなったが、やるしかない、という同法人の強い意志が関係者を動か

し、実現したものだ。

建設に当っては、何よりも家庭を離れて暮らす子どもたちの育ちの場として、小人数で家庭的な暮らしの場を提供するという考えを考えた。同時に、建替えては新築したことで、従来の建物で児童と成人が暮らしていた所から児童が新園舎に移ってスペースに余裕が生まれ、成人部の方々の生活の質の向上につながるということにも及ぶものだった。

新園舎の構想は、現理事長だけではなく、職員も含めて各地の先行して小規模グループケアを実践している施設を訪問・研修しながら練ってきただけあって、暮らす一人ひとりにとってはシンプルで、かつ「自分の部屋、自分の暮らし」を十分に意識できるように設計されていた。許される範囲で見せていただいた部屋はどの部屋も個性が大切にされ、「僕の部屋!」「私の部屋!」という喜びではじけた声が聞こえてきそうな雰囲気を感じた。

建物の造りは2階建てで、それぞれの階の両側にユニットがあり、真ん中にスタッフルームがある、というものだった。子どもたちの暮らしの場であると同時に、職員にとって孤立しがちなユニットケアを中央でジョイントする形は多くの施設で取り入れている構造で、メリットを感じるものだった。

訪ねた日は土曜日で、行事で外出している子どもも多く、限られた子どもたちの様子しか感じられなかったが、聞くところによると、やはり以前の建物にいた時とは比べものにならないほど落ちついた様子が



ユニットケアにより子どもたちとの個別の関わりが増えました

みられるという。逆に、職員たちが暮らしの場で何を
していいか戸惑う様子もみられ、これからの課題とい
うことだった。

入居している方々の「暮らしの場」に、「仕事の場」
として入る職員の意識的なバランスをどう調整してい
くか、ということは大舎型の施設ではあまり議論され
ることはないが、グループホームなども含めたユニッ
トケアを行っている現場ではしばしば耳にする課題だ
と思う。暮らしそのものの質を高めていくという視
点は、今回の訪問で大いに感じたことであったが、そ
れは後述することとする。いずれにせよ、集団の人数
の多さや「自分の～」を意識することができない規模
の生活空間で過ごす中で起きていた混乱やトラブル
は、建物の構造などハード面の整備によって大幅に軽
減され、一人ひとりの本質的な課題やニーズが絞られ
てきたことで、職員の本当の支援力が問われることにな
るだろう、との水流理事長のお話は説得力のあるも
のだった。

ガーデンキッズセルク・ガーデン キッズトリア

児童発達支援事業と放課後等デイサービス事業を行
うガーデンキッズセルクと同トリアは、本体施設など
がある鹿児島市郊外とは違って変わり、鹿児島市の繁
華街の中心地にある。かつて百貨店として営業し、今
は複合型商業ビルの3階にあるガーデンキッズセルク



ガーデンキッズセルクのソラニワ（屋上）で



臨床発達心理士による発達検査の様子

は、店舗の従業員のための認可外保育所の運営を委託
されたことがきっかけとなり、その後の流れの中で現
在の事業へと移行していったようだ。一般の買い物客
が行き来する店内と隣接する駐車場ビルの渡り廊下沿
いにあり、おおよそ福祉事業所とは思えない佇まい
で、何か習い事の教室のようにも感じられた。それは
別のビルの2階にあるガーデンキッズトリアも同様
で、いずれも若い元気あふれる保育士さんらが子ども
たちと楽しそうに活動していた。わが子に障がいがあ
るかも、あるいはそれがわかって先への不安が募
る、と不安を抱くこの時期に、視覚も含め、感覚的に
も利用するハードルは低くしつつ、活動そのものは子
どもたちやそのご家族のニーズにしっかり応えていく
専門性を有している。都市型児童福祉事業所の今後の
姿なのかもしれないと大いに感心させられた。

放課後等デイサービス シュバル

ホースセラピー（乗馬療法）の場として2015（平
成27）年10月にプレオープンした「あさひが丘乗馬
倶楽部」に、本年4月より放課後等デイサービス事業
所として、さらに6月より法人内のすべての事業所利
用者のホースセラピーの場として開設された。ミニ
チュアホースからポニー、サラブレッドまで10頭ほ
どの馬を飼育している。プロフェッショナルのインス
トラクターを法人職員として雇用しており、これまた
法人の本気度を大いに感じる事ができた。ホースセ
ラピーは単なる動物との触れ合いにとどまらず、乗馬



乗馬倶楽部シュバルのスタッフと水流理事長（右から
2人目）

での身体的効果なども大きいことは知られているが、
それを体験できる場はそうそうあるものではないだ
けに、上質の乗馬クラブをイメージさせる設備とス
タッフには驚くばかりだった。

おわりに

～上質の普通の暮らし～

今回の訪問は、土日を利用した1日半弱の取材であ
り、それぞれの一場面のみを切り取った断片的な視察
に留まった。よって時間軸による視点は、お聞きする
ことと、断面からの想像でしか持ちえないものでは
あったが、それでも多くの学びを得、大いに共感する
実践であった。

落穂会の事業展開は、個々のニーズにいていねいに
伝えるだけではなく、地域社会の状況を捉え、法制度を
活かしながら多角的になされているものだった。しか
し、この表現だけでは落穂会の実践を本質的に語って
いることにはならない。どの事業所、どの暮らしの場
を訪ねても漂っているのは穏やかな空気感だった。と
げとげしたり緊張感が漂うような雰囲気は感じられ
ず、信頼関係に基づく安心感のようなものを感じた。
同時に、昼食をごちそうになった就労継続支援B型
事業所の「カフェ NODOKA」は鹿児島市の某ネッ
ト飲食店ランキングで上位にランキングされるなど
“上質なもの”を追求する姿勢は随所に感じられるも
のだった。



1階はベーカリーショップ、2階はカフェ

上質なものを提供しようという明確な意識の高さ
と、ゆったりとした空間は、穏やかな“間”を生み出
し、その中で営まれる信頼に基づいた人間関係の中
で、人は安心して過ごせるということを実証している
と感じた。

様々な要因によって地域社会の中で“普通に”暮ら
すことが困難な方たちがいる。その方たちに暮らしの
場、労働や活動の場、そして何よりも人間関係におい
て上質なものを提供することは努力と工夫と配慮を地道
に積み重ね、それを“普通のもの”にしていくこと
でしか実現しない。

「歴史」「理念」「実践」、そしてこれらを貫く創設者
から揺るぎなく脈々と流れ続ける水の流が落穂会の
今日を生み出しているのではないだろうか。

今回ご案内いただいた法人内外で多くの重責を担っ
ている水流理事長をはじめ、不在がちな理事長を支え
て現場をまとめ上げている統括副施設長の奥様、そし
てそれぞれの訪問先で温かく迎えてくださった職員や
利用者の皆さまに、この場を借りて感謝申し上げます。

視察後の夜には遠い私の地元岩手の地を訪ねてくだ
さったことのある職員の方々と旧交を温める場を設け
てください、離れていても思いは一つ、ということ
をあらためて感じる事ができ、本当にうれしい訪問と
なった。

佐藤真名（編集出版企画委員会委員）